

夜間部学生の健康管理

佐 藤 隆

I. 序

学校における教育の目的について、教育基本法第1条は、教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない、と示してある。

すなわち、学校教育の目的が心身ともに健康な国民を育成することにあるのであるから、学校における保健は当然学校教育の主目的でなければならない。しかしながら従来学校教育において、学徒の發育、健康の保持増進についての指導と管理とが、学校教育の目的を達するための条件を十分充たしていたかどうかという、その重要性については、いちおう理論として考えられ、主張されているが、学校経営者も、教育者自身も、教育の主流をはなれた、特殊な指導であり、管理であり、また特別な行事であるかのように考え、学徒の發育、健康の保持増進についての指導と管理とは、学校経営の實際面において真の姿を見出すことは極めて少なかったのである。この様な状態では、学徒の發育、健康の保持増進、心身ともに健康な国民を育成するという学校教育の目的を達することは困難である。

この様な状態にある我国の学校保健も、最近関係者の熱意により、関係法令の充実と予算の拡大により、僅かながら望ましい方向に向いつつある。然しこれも小・中・高校の範囲に限られて居り、大学は相変らずその独自の立場に任されているだけで、顕著な進歩を認めることが出来ない。殊に夜間部の学生については、その特殊な就学条件からして一層の配慮を必要とするにも拘わらず、放置されている有様で、教育上寒心にたえない次第である。

ここで学校保健を推進めるための基礎となる学徒の健康管理が極めて大切なことであることを考え、特に夜間就学する学生の保健面の実態を調査することによって、望ましい管理方式を研究し、その指導の効果を挙げる様努力しなければならぬと思う。

一般に夜間部の学生は昼間勤労に従事している者が多いのであるが、単に昼間勤労者であるだけであれば、勤務先での健康管理についてだけ考え、勤務時間外は、家庭等における休養時と考えてよい訳であるが、勤労学生は勤務終了後登校、数時間の受講の帰宅後、更に或程度の自習ということも考えなければならず、その健康を維持することが極めて困難であることが明らかである。

この様に複雑な就学条件を持つ夜間学生を対象として、その健康管理の方策を建てようとするには、先ず学生自身の現在おかれている環境について充分検討する必要がある、更に現在学生に対する健康管理が、どの様に行われているかを知らなければならない。これらの結果から、実情に則した、のぞましい管理方策が打建てられることになるであろう。

以上の観点から、先ず明治大学について、2部学生の実態がどの様であるか、又その就学環境がどの様であるかを検討することとした。

Ⅱ．夜間学生の実態

夜間学生の実態を知るために実施した調査及び参考とした資料は次の通りである。

イ．明治大学2部学生実態調査……昭和34年度入学の法・商・政各学部二次男子学生700名について、保健面を中心として実態を調査したものである。

ロ．夜間学生の実態調査（資料）……昭和32年大学体育協議会正課部会が、夜間学生の体育実技について研究するために実施した調査で、京浜地区の夜間部を有する大学十数校、学生数男子1833名、女子298名について調査したものである。

ハ．学生の保健知識についての調査……昭和35年大学体育協議会保健部会

が、新入学生の保健知識をテストするために実施したもので、明治大学についてだけ集計したものである。

二そ、その他……参考資料として文部省学校衛生統計報告書（32，33年）明大定期健康診断報告書，明大診療所受診簿，明大教務課学生休退学届綴等を利用した。

1. 年 令

第 1 表

年 令	19 才	20 才	21 才	22 才	23 才	24 才 以 上	無記入	計
人数	163	237	124	68	44	47	17	700
%	23.3	33.9	17.7	9.7	6.3	6.7	2.4	

2部2年次の学生の年令分布は第1表の通りで19・20・21才が全体の75%を占めている。平均年令も昼間部学生に比して僅かに多いだけであるが、24才以上の6.7%は昼間部に見られない夜間部の特性である。又これによって高校卒業と同時に入学する者よりも、1年乃至2年の間において入学する者が多いことが知られ、それも入学試験に不合格のためではなく、先づ就職、それから進学という形であることがうかがわれる。

2. 出身校

第 2 表

学校種別	全日制高校	定時制高校	そ の 他	計
数	599	79	22	700
%	85.6	11.3	3.1	

出身校は全日制高校が85.6%で大部分を占め、定時制高校出身者は11.3%に過ぎない。これは32年度大学体育協議会正課部会が実施した夜間学生実態調査による24%を大分下廻るものであって、定時制高校出身者の進学が年々困難になっているのではないと思われる。

3. 職業の有無

第 3 表

	勤務を持っている	持っていない	無記入	計
数	561	115	24	700
%	80.1	16.4	3.5	

職業は80%が勤務を持って居り、夜間部の学生は大部分勤労学生であると言
ってよい。一部の大学では夜間部の学生の40%約以上が職業を持たない例があ
るが、明大では16.4%だけであり、大学体育協議会調査結果の18%と差がな
く普通の状態であるといえよう。

4. 勤務先の業種

勤務先の業種を調査の結果から多い順に挙げると、製産・一般公務員・商事
会社・臨時的勤務・卸小売・保険・出版等であり、又職種を現業・非現業にわ
けて見ると現業は非現業の約2倍になっている。

5. 勤務による月平均収入

第 4 表

金額	3,000円 以下	～5,000	～10,000	～15,000	～20,000	～30,000	30,000 以上	無記入
数	8	32	292	155	20	3	4	47
%	1.4	5.7	52.0	27.6	3.6	0.5	0.7	8.9

勤務による月平均収入は、第4表の通り大体5,000円から15,000円程度で
ある。この収入は大学体育協議会調査によると、約50%の者がこれだけで生
活費及び学費をまかなって居り、両親の援助や奨学金を得られない者が非常に
多いことを物語っている。

6. 健康状態について

(1) 既往症

第 5 表

	小学校入学以前	小学校時代	中学校時代	高等学校時代	無 し	計
数	26	33	14	25	610	700
%	3.7	4.7	2.0	3.6	87.0	

過去の病歴は第5表の通り既往症のある者は極めて少なく、大部分健康であった様である。

(2) 明大入学後の健康状態について

第6表

	極めて健康	普通	少々弱い	病気勝ちである	現在罹病中	無記入	計
数	155	458	58	12	3	14	700
%	22.0	65.4	8.3	1.7	0.4	2.0	

現在の健康状態について 87.4% は健康又は普通と答え、身体の弱いと自覚している者は 10.4% である。然し実際に罹病中又は病気勝の者は 2.1% であって、この結果では決して多いとはいえない。明大学生課が集計した34年度定期健康診断成績表によると、2部健康診断受診者 3,505 名中 122 名が精密検査を受け、その中21名が要養護者として注意を受けている。この結果は第6表に比べると大分低い値を示しているが、健康診断の 42.8% という低い受診率からすると、むしろ第6表の方が正確な値に近いのではないと思われる。

7. 34 年度中の罹病と受診

(1) 34 年度中の罹病の有無

第7表

34年度中医師の診療を受けたことが	あ る	な い	無 記 入	計
数	140	478	82	700
%	20.0	68.3	11.7	

34 年度中に病気にかかって医師の診療を受けた者は 20% に達している。この数は他に比較すべきものがないのでどうとも言えないが、必ずしも多いとは言えない様である。

(2) 受診場所

34 年度中に病気にかかった際、何処で診療を受けたかをたずねたのであるが、圧倒的に一般病院が多く、勤務先の診療所がこれに続き、保健所や大学の

第 8 表

場所	保健所	勤務先の 診療所	明大の診療所	一般病院	その他	無記入	計
数	7	62	13	122	23	475	702
%	1.0	8.9	1.9	17.4	3.3	67.9	

診療所は余り利用されて居らないことがわかる。猶この表で合計及び % の計が合わないのは、一人で2ヶ所以上で受診したものがあったためである。

(3) 健康保険の利用

第 9 表

種類	国民健康保険	家族の健康保険	自分の健康保険	その他	無記入	計
数	21	31	166	9	475	702
%	3.0	4.4	23.7	1.3	67.9	

(2)で受診の際、利用した健康保険はどのようなものを調査したのであるが、大部分勤務を有する関係上、自分の健康保険を利用している、この点は昼間部の学生と大いに異なる点で、勤労学生の特典ともいえるであろう。

8. 食事について

第 10 表

1日の食事回数	2 回	3 回	4 回	無記入	計	学生食堂での食事
数	48	512	119	26	700	274
%	6.1	73.1	17.0	3.7		39.1

1日の食事の回数は、3回が73.1%、4回が17.0%である。注目すべきことは、2回というのが6.1%あることで、昼間勤務を持たない学生だけであれば、それ程問題とする必要はないと思うが、この中には相当勤務を有する者もあって、これで果して勤務プラス学業に必要な栄養が十分摂れるものであるか心配である。勿論3食摂っている者についても同様なことがいえる訳で、この事に関する充分なる調査が必要であるが、残念乍ら今回は実施することが出来なかった。

9. 住居について

住居は 50% が自宅、35% が下宿で他は勤務先の寮・大学の寮・その他の寮等である。大学体育協議会の調査結果も、大体これと同様であったが、昼間部学生に比して自宅から通学する者が多い。これは地方出身者が上京して職を求め、そして夜間の大学に通学することの困難を物語るものである。

10. 勤務による疲労感（勤務終了時）

第 11 表

疲労の程度	非常に疲労 を感じる	少々疲労を 感じる	別に疲労を 感じない	体の調子が よい	無記入	計
数	100	267	131	10	53	551
%	17.8	47.6	23.5	1.8	9.3	

勤務終了時の疲労感は第 11 表の通り、約 65% が疲労感を訴えている。この数は極めて多いものであるが、大学体育協議会調査によるとこの大部分が精神的な疲労感であって、肉体的なものは少いとされている。このことは第 6 表に示した現在の健康状態について、87.4% が健康であると自覚していることから推察されるところである。然し乍ら、この様に多くの者が疲労感を持って登校するのであるから、大学の受講が更に疲労を増すことの少い様充分配慮されなければならないであろう。

11. 定休日

第 12 表

定休日	週			月					無し	無記入	計
	1 日	2 日	3 日	1 日	2 日	3 日	4 日	5 日			
数	359	19	10	6	26	5	10	1	41	84	561
%	64.0	3.4	1.8	1.1	4.6	0.9	1.8	0.2	7.3	14.9	

定休日は大部分週休制をとっているが、月 1 日乃至 2 日の定休日しかないものが 5.7% あり、定休日の全然ない者が 7.3% もあることは驚く外ない。もちろんこの中には臨時的職業であるため定休日のない者が 5% をしめてはいるが、それにしても定休日がないということは問題であろう。

12. 有給休暇

第 13 表

年間日数	3 日まで	～ 5 日	～10日	～20日	～30日	それ以上	無し	無記入	計
数	7	8	85	209	21	5	96	130	561
%	1.2	1.4	15.2	35.5	3.7	0.9	19.9	23.2	

休日以外の年間有給休暇も定休日と同様の傾向で、年 20 日程度が大体標準である。然し有給休暇がないと答えたものが 20% にも達し、前時代的な戦場の相当多いことを物語っている。

13. 通学に対する勤務先の理解と配慮

第 14 表

	通学に特別の配慮をしてくれる	通学を認めている	別に何ともいわれない	勤務に支障のない限り認める	あまり好意的でない	認めていない	無記入	計
数	112	215	78	64	19	3	70	561
%	20.0	38.3	13.9	11.4	3.3	0.5	12.6	

勤務先の夜間通学に対する態度は先ず好意的であると見てよい様である。然し実際には学生自身が他への遠慮から、多忙の時など欠席や遅刻をしている様で、当然の権利として遠慮なく通学出来る様になるまでには、まだ時間が必要である様に思われる。

14. 夜間学生の保健知識

35年度、大学体育協議会保健部会の依頼によって、明大の1部・2部各1年次学生について保健知識のテストを実施したが、その結果は次の如くである。

昭和 35 年度保健知識テスト問題

1. _____ 部 _____ 学部 _____ 学科 _____ 学年 _____ 組 _____ 番

氏名 _____ 男 女

1. 次の文に適当な語句を補って完成しなさい。

_____ (1)の保健憲章には、健康とは単に _____ (2)や _____ (3)がな

いだけでなく _____ (4)にも _____ (5)にも, また _____ (6)にも全く
良好な状態をいうと述べられている。

2. 次の文のうち, 誤ったものを抹削なさい。

出生率は普通 $\frac{\text{出生数}}{\text{人口}} \times 1,000$ で表わす。

3. 最近わが国の人口はどの位か。

4. 定期的健康診断によって, 病気の発見と予防に役立つ病名に○印をお
つけなさい。

- 1 ガン 2 水痘 3 たん石 4 赤痢 5 肺結核
6 心臓病 7 高血圧 8 コレラ

正答

1. (1) W・H・O又は世界保健機構

(2) 病気又は疾病 (或いは虚弱又は病弱)

(3) 虚弱又は病弱 (或いは病気又は疾病)

(4) 身体的又は肉体的 (或いは精神的)

(5) 精神的 (或いは身体的又は肉体的)

(6) 社会的

2. 出生率は普通 $\frac{\text{出生数}}{\text{人口}} \times 1,000$ で表わす。

3. 8,800 万~9,300 万が正解。

4. ① がん ⑤ 肺結核 ⑥ 心臓病 ⑦ 高血圧。

テストの結果

受験者数	1 部 349名	2 部 266名
1. (1)	63.6%	16.2%
(2)	86.2%	76.7%
(3)	49.6%	14.7%
(4)	94.6%	81.2%
(5)	91.9%	78.2%

(6)	74.5%	43.2%
1 番全問正答	34.9%	0%
2.	72.8%	21.1%
3.	74.6%	65.8%
4. ①	60.1%	39.1%
⑤	98.9%	99.9%
⑥	42.9%	43.9%
⑦	65.1%	54.1%
4 番全問正答	23.8%	13.2%
1～4 全問正答	8.6%	0%

このテストの問題は、極めて常識的なものであって、高校は勿論、中卒程度でも相当高い正答率を予想されているものである。しかし結果は以上の通りで夜間部学生の保健知識の貧弱であることが明らかに示されている。

15. 夜間学生の実態についてのまとめ

以上の調査結果からみるに、明大2部学生は、他の夜間学生と同様に、相当困難な条件の下に通学して居り、勉学を続けるために、勤務や生活の面で相当のぎせいをはらっている。そのため登校時には、勤務による疲労感を回復せぬままに居り、入学時の健康状態も次第に失われて行く様に思われる。2部教務課の学生休退学届を見ると、34年度入学者の中69名が退学して居り、その中13名が病気によって退学している。又休学者は28名であるが、病気によるものが過半数の15名をしめている。これは定時健康診断からは知ることの出来ない実態であって、1部の学生に比して非常に大きな数字である。

それにもかかわらず、学生の保健に対する無関心と知識の不足は、その将来を一層暗くするものであって、関係者のみならず、大学全体として、充分研究し、配慮しなければならない問題であろう。

II 健康管理の実態

いままで夜間学生がどのような状態にあるかを述べたが、この様な状態にある

学生が、保健の面でどのような環境の中に生活しているかを知る必要がある。先づ学生自身が、その健康を維持するために、どのようなことをしているか、その勤務先ではどうか、更に大学ではどのようなことをしているかを、健康管理とそれに附随する保健事業的な面から述べてみたい。

1. 健康を維持するための努力

学生が、自分の健康を維持するために、日常どのようなことを心掛けているかを調べたところ、

イ. 睡眠を充分とる	63.7%
ロ. 食事で充分栄養をとる	54.7%
ハ. 規則正しい生活をする	41.0%
ニ. 暇があったら横になって休む	36.0%
ホ. 居室衣服等の衛生に特に注意している	31.0%
ヘ. 休日等にハイキング等に出掛ける	26.4%
ド. 休憩時間にスポーツを行う	23.3%
チ. 勤務先の運動部に所属して運動を行っている	14.3%
リ. 定期的に（年3回以上）健康診断を受ける	13.6%
ス. 1日1回軽い体操をする	12.6%
ル. 栄養剤を常用している	9.4%
ヲ. 毎朝体操をする	5.1%
ワ. 大学の運動部に所属して運動を行っている	4.0%
カ. 住居附近の町のクラブに所属して運動を行っている	2.9%
ヨ. ボディビルディングを行っている	1.6%
タ. 体温・脈膊等を毎日定時に計る	0.1%
レ. その他	3.1%

以上の様な結果であった。一応殆んどの者が何か心掛けている形ではあるが、特別に心掛けているといえるのは、リの 13.6% とタの 0.1% 位であって、極めて少い状態である。矢張り充分保健についての知識を得て、それを実際に生かす様な指導が必要であろう。

2. 大学の診療所について

大学の診療所について、どの程度知っているかを調べてみたところ、

第 15 表 明大の診療所が夜間開設されていることを知っていたか、

	知っていた	知らなかった	無記入	計
数	272	418	10	700
%	38.9	59.7	1.4	

第 16 表 診療所は何曜日開かれているか知っているか

	知っている	知らない	無記入	計
数	41	625	34	700
%	5.9	89.3	4.9	

第 17 表 今までに診療所を利用したことがあるか

	あ	る	な	い	無記入	計
数	35		622		46	700
%	5.0		88.9		6.6	

第 15, 16, 17 表の如くであった。まず 60% の者は診療所が夜も開かれていることを知らず、又開かれている曜日については 90% が知らない有様である。利用したことのある者が 5% で、開設日を知っている者が 5.9% ということは、登校時具合が悪くなって、尋ねでもしない限り、知る機会がないと考えることが出来る訳で、折角の施設と夜間開設の効果がさっぱり現われていないと言ってよいであろう。34 年 4 月から 10 月までの診療所の受診簿を見ると、2 部学生の受診は 35 件にすぎず、その利用度の極めて低いことを物語っている。これは学生に対する PR が足りないことが大きな原因になっていると思われるので、充分学生にしらしめると共に、授業日には常に開設する様に進めたいものである。

3. 大学の定時健康診断

第 18 表 34 年度 1 部男子受診率

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	計
在籍数	5604	5829	4988	5437	21858
受診者数	4587	3221	2098	2649	12556
受診率	81.6	55.2	41.2	48.7	57.4

第 19 表 34 年度 2 部男子受診率

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	計
在籍数	2136	2116	1735	2026	8013
受診者数	1572	781	601	516	3470
受診率	73.5	36.9	34.6	25.4	43.3

第 20 表 34 年度 1 部女子受診率

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	計
在 籍 数	138	144	156	153	591
受診者数	110	27	5	31	173
受 診 率	79.7	18.7	3.5	29.2	29.2

第 21 表 34 年度 2 部女子受診率

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	計
在 籍 数	36	40	40	49	165
受診者数	22	6	2	5	35
受 診 率	61.1	15.0	5.0	10.2	21.2

第 18, 19, 20, 21 表は、34 年度定時健康診断の受診率を学生課がまとめたものである。一見して受診率の低いことが判る。殊に 1 年次は 70~80% 程度でそれ程でもないが 2 年次以後急激に低下することは、学生の健康診断についての理解のないことを示すものである。1 部と 2 部とでは大分差があり、又男子に比して女子の受診率の悪いことも著しい。文部省の 32 年度学校衛生統計

報告書によると、全国の大学における受診率は昼間部男子 75.7%，夜間部男子 53.7%，昼間部女子 88.4%，夜間部女子 65.9% で明大より遙かに高い率を示している。すべての健康管理、保健計画の重要な基礎資料となる定時健康診断の受診率がこの様ではいけない。勿論明大としても、35年度学生部が中心となって定時健康診断委員会をつくって、対策を講じたが、新入学生の受診率を少々高めたにすぎず、根本的な解決をみることは出来なかった。

又、この定時健康診断の結果はどの様に扱われているかという点、検診の結果を文部省に報告、一般検診の結果、精密検診を要する者に受診させ、その結果を本人及び父兄に連絡するに止っている。

4. 大学の就学環境について

第 22 表 教室の広さについて

	狭くて坐れぬことが多い	大体適当である	余裕がある	無 記 入	計
数	145	462	49	44	700
%	20.7	66.0	7.0	6.3	

第 23 表 教室の照明

	極めて良い	普 通	悪 い	極めて悪い	無 記 入	計
数	39	508	101	22	30	700
%	5.7	72.6	14.4	3.1	4.2	

第 24 表 室温の調節

	極めて良い	普 通	悪 い	極めて悪い	無 記 入	計
数	13	255	316	96	20	700
%	1.9	36.4	45.1	13.7	2.9	

第 25 表 換 気

	極めて良い	普 通	悪 い	極めて悪い	無 記 入	計
数	11	284	300	84	21	700
%	1.6	40.5	42.9	12.0	3.0	

第 26 表 騒音（防音）

	極めて良い	普 通	悪 い	極めて悪い	無 記 入	計
数	6	62	305	281	15	700
%	0.9	13.1	43.8	40.1	2.1	

就学環境について、学生はどう感じているか尋ねたのであるが、教室の広さについては狭いというものが 21% あり、級によって、窮屈な教室で受講している者がある様である。教室の照明は大体良いと感じている様であるが、部屋によって全体が一樣の明るさでないところがあり、そのため 17.5% の者が悪いと感じている様である。室温の調節と換気については半数以上が悪いと感じている様であって換気装置をもつと良くしなければなるまい。防音については、校舎の位置から止むを得ない点もあるが、約 85% が騒音に悩まされていることになる。特に表通りに面した教室の防音に充分留意する必要があると思われる。以上就学環境については、学生はまだ不十分であると思つて居り、この面の健康に対する影響を考えるならば、学校当局も充分配慮する必要がある。

5. 保健面での大学への希望

第 27 表

項 目	数	%
イ. 学生食堂を充実してほしい。	433	61.9
ロ. 休憩室を設けてほしい。	322	46.0
ハ. レクリエーション活動のための施設を充実してほしい。	295	42.1
ニ. 就学環境を整備してほしい。	238	34.0
ホ. 健康相談がいつでも受けられる様にしてほしい。	149	21.3
ヘ. 学生健康保険をつくってほしい。	142	20.3
ト. 診療所を毎日開設してほしい。	65	9.3
チ. 其 の 他	10	1.4
無 記 入	43	6.1

保健的な面でどのようなことを大学に希望するか尋ねたのである、62%の者が学生食堂の充実を希望している。第10表で、大学の学生食堂利用者を調べてあるが、これでは39%が常時利用していることになっている。ここでそれを上廻る62%の者が学生食堂改善充実を希望していることは、詳細について調査はしなかったが、価格・品質・品数・食堂の広さ、従業員の態度、注文後の待時間等色々問題があるであろう。ロの休憩室については予想外のことであって、第11表で示した様に勤務終了時間相当疲労を感じて登校する様であるが、受講中休憩したいと思っても適当な休憩室がないと、結局早退することになる。又休講時等も適当な休憩のための施設がないことは、次の講義受講の意欲をなくすることになるであろう。レクエーション活動のための施設についての希望は当然であろう。勤務による疲労感には精神的疲労が多い様にいわれて居り、精神的疲労は適度な身体活動によって恢復出来るとされているからである。明大では夜間部に限らず昼間部でも、正課体育時以外に学内の体育施設を利用することが困難である。学生がすすんで行う課外の運動が、健康の維持と体力の増進に欠くべからざるものであることは明らかであるから、この希望については大いに配慮する必要がある。就学環境については、第22表から26表までに示された結果からして当然の希望であろう。健康相談がいつでも受けられる様にしてほしいという希望が21%あることは、学生の中に、自分の健康について心配して居りながら、健康相談の機会を得ないでいる者が相当あることを示している。現在学生部委員の中に保健委員になって居られる方がある様であるが、専任の医師か又はこの面に興味を持ち、研究をしている人をヘルス・カウンセラーとしておきたいものである。学生健康保険をつくることの希望が20%で、案外少いが、第9表でも見られる様に、各種健康保険を利用出来る者が相当多いためであろうと思われる。診療所を毎日開設する件については、診療所が利用出来ることを知らなかった者が60%以上も居り、実際に利用したことがある者が僅か5%では、この希望が強く出て来ないのは当然であろう。

6. 勤務先について

第 28 表 従業員数

	～100 名	～500 名	～1,000 名	1,000 名以上	無記入	計
数	206	97	33	158	67	561
%	36.7	17.3	5.9	28.1	12.0	

第 29 表 所在地

	都 心	都 内	都内(郊外)	都 下	他 県	無記入	計
数	254	211	20	11	38	27	561
%	45.3	37.6	3.6	3.6	6.8	4.7	

勤務先の従業員に対する健康管理や保健施設を知りたいと思い、先づ企業の大きさを知るために従業員数を調べた。100 名以下の 36.7% が最も多いが、1,000 名以上の 28.1% も相当の数である。結局大企業と小企業が半々であると考えてよいであろう。勿論大企業とされている中には、官公庁が相当数あることになる。勤務先の所在地は通学の便と、その環境について知りたかったのであるが、約 80% 以上都心に近いところであって、通学には便であるが、環境的にすぐれてはいないものと考えられる。

7. 勤務時間と休憩時間

第 30 表 勤務時間

	5時間 まで	7時間 まで	9時間 まで	それ以上	隔日勤務	その他	無記入	計
数	13	89	387	6	41	11	14	561
%	2.3	15.9	68.9	1.1	7.3	2.0	2.5	

第 31 表 休憩時間

	15分まで	30分まで	1時間 まで	1.5 時間 まで	2時間 まで	それ以上	無記入	計
数	0	12	336	100	20	6	87	561
%	0	2.1	59.9	17.8	3.6	1.1	15.5	

勤務時間は8時間程度が大半で標準的であるが、隔日勤務やその他の形の勤務が9.3%ある。これは警官・消防官・鉄道員等であるが、このような勤務が通学に支障あることは明らかである。休憩時間は大休1時間程度で昼食時の外に午前・午後夫々15分程度の小休憩のあるところが多い。

8. 勤務先の医療施設

第32表 診療所

	あ	る	な	い	無 記 入	計
数		266		213	82	561
%		47.4		37.9	14.7	

第33表 指定医院

	あ	る	な	い	無 記 入	計
数		269		164	128	561
%		47.9		29.2	22.9	

第34表 休憩室

	あ	る	な	い	無 記 入	計
数		227		220	69	561
%		48.5		39.2	12.3	

勤務先の診療所、指定医院は、ないと答えたのが夫々37.9%、29.2%であって、従業員の少い企業36.7%と大体一致する。又休憩室も同様の傾向を示している様である。

9. 勤務先の保養施設

第35表 山寮・海浜寮・保養所等

	あ					な	い	計
	山 寮	海浜寮	保養所	その他	計			
数	134	174	136	8	452	198		650
%	23.9	31.0	24.4	1.4	80.7	37.1		

勤務先に山寮・海浜寮・保養所等のないところは 37.1% で前項の診療所、指定医院等と同様である。

10. 勤務先での定時健康診断

第 36 表

	あ る					な い	無記入	計
	年 1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上			
数	168	172	6	7	1	106	101	561
%	29.9	30.7	1.1	1.2	0.2	18.9	18.0	

勤務先で、定時健康診断が行われているところが約 63% で、年 2 回というのが 30% もあることは、よろこばしいことである。これと大学に於ける定時健康診断を確実に受けていれば、或程度健康診断の目的は達せられるものと思う。然し乍ら、ないものが約 19% あり、この様なところに勤務している者は、せめて大学の定時健康診断だけでも必らず受ける様にしたいものである。

11. 健康管理の実態のまとめ

学生自身についてみると、一応自分の健康については関心を持ち、何らか心掛けているものは多いが、医学的根拠に立って行っているものは極めて少く、保健知識の不足もあって、今後充分の指導を必要とする様である。

大学については、先づ最も大切なことは、定時健康診断の受診率が極めて低いことであり、この面の改善なしには管理も指導も、その発展を望むことは無理であろう。又就学環境については、漸次改善されつつあるが、まだ不十分であり、今後一層の配慮を必要とする。これにともなって学内食堂の充実、休憩室の設置、レクリエーション施設の設置が強く望まれる。

勤務先については、大企業よりも小企業に勤務する者が僅かに多く、そのため保健面で恵まれた環境にある者よりも、恵まれない環境にある者の方がいくらか多い様である。恵まれた環境にある者は、むしろ昼間部の学生よりも良く又一方恵まれない者は、極めて悪い環境にある。この恵まれない学生のための対策を学校として重点的にとりあげることが、早急になすべき任務であると

思う。

Ⅲ 大学における健康管理の在り方

今まで夜間学生の実態と、その環境即ち大学及び職場がどの様であるかをみた訳であるが、矢張り、夫々大きな問題を持っていることが判った。ここで学生個人としてなすべきことは各自の保健知識をたかめ、既にある組織や施設を充分生かして、健康の維持増進に役立てるという事に要約されると思う。又職場については、これは社会全体の問題であって、社会の保健に対する関心をたかめると共に、何等かの形で政治的措置がのぞまれる。

ここでとり上げることは、大学がその教育の目的を達するために、学生の健康の維持増進にどの様な手を打つかということである。今まで述べたことから明らかになった問題点を解決するためには、その組織や施設、そしてどの様な計画をたて、どの様に実施しなければならないかを考える必要がある。

1. 組 織

明大の現在の保健に関する機構は、事務的には学生課がこれに当り、定時健康診断の実施と報告、診療所の管理に当たっている。診療所の中では、歯科だけが学生課から離れて、特別の形になっている様で、理解に苦しむところである。学生部の中に保健委員が居り、これは学生部委員が兼ねている。この保健委員が、大学全体の保健計画をたてることになると思われるが、実際にどの程度の活動をしているかよくわからない。この保健委員と学生課・教務課・体育課の職員、それに体育担当教員が加わって定時健康診断委員会が構成されて、定時健康診断の受診率をたかめるための対策を研究している。大体以上の様な形になっている様であるが、先づその中心となる責任者と組織がはっきりしていない様で、常時活動する母体がない様に思われる。

これではとても、充分な健康管理を行い、保健計画をたててそれを押進めることは出来ない。大学の保健全体について研究し、計画をたてるために保健委員会を設ける必要がある。構成員は学生部委員がこれを兼ねてもよいが、他に校医と専任の教員を当て、更に事務担当者をこの仕事の専任者として入れな

ればならない。医師である保健理論担当の専任教員をこれにあてることが出来れば最も都合が良い訳である。

この委員会の任務は大学全体の保健計画をたてることで、そのための資料は事務担当者が準備する。委員の中の専任者は、常時事務担当者と共に資料をあつめて管理すると共に、学生保健相談の担当者となり、校医又は診療所の医師との連絡をはかる。事務担当者は学生課に所属することは差支えないが、他の仕事を兼ねない様にする必要があり、又現在の様に健康管理と診療所は学生課の所管で、就学環境は一切管財課という様にはなれてはいけない。保健関係について一切をまとめて取扱う保健課か、又は課外体育も同時に取扱う保健体育課という様なものが出来ることが最も都合が良いであろう。

2. 休憩室

学生の希望にもあった様に、休憩室の設置は是非実現して貰いたいものである。勿論、これは保健委員会の指導の下に、専任の事務員が管理する。騒音を避けることの出来る落ち着いた雰囲気の中で、簡単に休養出来るソファやベッドが準備されている。これに接して学生健康相談室が設けられて居れば、猶好都合である。身体計測器械や体温計等が備えてあれば、学生自身の健康管理上大いに役立つであろう。勿論ここも診療所と連絡をとり、診療を必要とするものは、すぐ手配される。この程度のことは単なる理想ではなく、或程度の努力で実現すること出来るものと思われる。

3. 診療所

診療所の医師は校医であってほしい。そして必らず保健委員会のメンバーであることを必要とする。現在の形では学内に他の医院が開業している様なものであって、大学の保健計画にもとづいた活動をしてもらうことが出来ない。定時健康診断も、これだけを別に委託する形であるため、大学側の意向が充分医師に届いておらず、又検診の結果について、医師として考えることがあっても、それを実現することが困難な様である。診療所を学内の組織の中に入れ、専任の医師を置くのでなければ、その機能を充分発揮し、立派な成果を挙げることは困難であろう。

4. 健康診断

定時健康診断は学校保健法に基いて行うもので、大学はこれを実施し、文部省に報告する義務がある。この受診率の悪いことは、単に報告上不体裁ということではなく、学校保健上重大な支障を来す原因となるものである。即ち如何に組織が充実し立派な管理方式が出来ていても、全学生についての診断結果が揃っていないければ、常に一部について見ているだけで、実情に則した保健計画をたて、効果的に実行することが出来ないということになる。又逆に言えば、受診結果をただ集計報告するだけで終るならば、受診者にとって何の役にも立たないということにもなる。学生の受診率の悪い原因の一つに、受けても受けなくても別にどうということはあるまい、という考があることは否定出来ないと思う。定時健康診断の受診と学割や受験届、或いは体育実技単位等を関係付けてその成績をあげ様とすることも一つの方法ではあるが、根本的に、受診することが、自分自身にとって非常に役に立つことであり、学校が自分の健康を常時心配してくれることになるのだと考え得る様な管理方式をとらなければ、如何に受診率をあげても、学校保健の目的から遠く離れたものになってしまうであろう。健康相談にしても、本人の申出を待つのではなく、定時健康診断の結果、異常のあった者等については、積極的に連絡し、診療所の医師の応援を得て、単に注意するだけでなく、完全に治癒するまで指導を続けるという様にすることが、真の健康管理であり、保健指導であるといえよう。

5. 健康相談

学生部の委員が、学生から色々持込まれる相談の中には、どうしても本人の健康と切離すことの出来ない問題が多いことと思う。学業の問題にしても、精神的な問題にしても、又経済的な問題でも、健康を無視して解決出来ないものが多いと思う。この場合、健康が第1だから身体に充分注意して、というだけで健康の面を片附けたのでは真の解決にはならない。その点で、学生相談室には、学生の保健を担当する者がいて、専門的に相談を受け、又他の分野についても助言する必要がある。前に述べた学生健康相談室の仕事と重複するならば、それと兼ねても良いであろう。WHOの保健憲章には、健康とは単に病氣

や虚弱でないだけでなく。肉体的にも精神的にもまた社会的にも、全く良好な状態をいう、と定義しているが、この様な健康に導くことこそ学生相談本来の目的であり、健康面の指導をゆるがせに出来ない所以でもある。

6. 大学に於ける健康管理の在り方のまとめ

学生の健康管理についてだけ考えたいと思ったが、問題の性質上どうしても保健全体について考えざるを得なかった。要するに学校保健を充実するためには先づ管理をしっかりとすることからスタートしなければ先に進まない訳であり、そのため最も大切なことは熱意ある人々が集って活動し易い組織をつくることである。夜間部学生の実態から入ったが、夜間部の学生にとって大切なことは昼間部の学生にとっても大切であり、どこから研究して入っても同じ結果に到達するものと思う。

以 上